走り読み文学探訪リバイバル(その31)

「太陽の子」　灰谷健次郎　　紹介者：榎本博康

［紹介］

神戸の下町に琉球料理店「てだのふあ・おきなわ亭」がある。てだは太陽、ふあは子という意味だ。ふうちゃんはその店の一人娘で、小学校６年生。両親は沖縄出身で、沖縄にゆかりのある常連達が毎晩通ってくる。

しかし、おとうさんがおかしい。心の病気にかかってしまった。おかあさんをはじめ、皆がその原因を探る。やがて沖縄戦に鍵があるのではないかと、気付く。

沖縄出身の皆んなは沖縄党だが、うちは神戸で生まれたから神戸だと言っていたふうちゃんが、沖縄を勉強し、沖縄も自分の一部と認識する。そして、戦争を知る。そしてててだのふあ・おきなわ亭に集まる人達の優しさ、暖かさがどういう所から来ているのか、ふうちゃんは理解し始める。

［感想］

群馬大の山西先生から、灰谷健次郎さんの作品を採り上げてみてはと示唆を受けてから久しい。だが灰谷作品は難しいのだ。所が沖縄サミットが2000年7月21日から開催され、二千円札が発行される世の中、覚悟を決めて書くこととした。

作品はふうちゃんが、両親と一緒にハイキングをしているような場面から始まる。真っ赤に一面の曼珠沙華の咲く場所に出る。「とつぜん、ふうちゃんは駈けだした。おとうさんの手をひいてぐんぐん駈けた。」おとうさんは息を切らして倒れた。そこで持ってきた重詰料理のお弁当を食べた。中は沖縄の三月節句を祝う琉球料理で、赤づくしである。そんな風景の中に、一叢の白い曼珠沙華がきりりとあった。そして、おとうさんの病院に着いた。

おとうさんはノイローゼと書かれているが、うつ病のようである。家族やふーちゃん家の琉球料理の店、「てだのふあ・おきなわ亭」に集まる人達が、おとうさんの心の病気を治すにはどうしたら良いかと心を砕き、その原因を探ろうとする。

おとうさんの放浪癖が始まった。ある人が、おとうさんが山陽電車の東二見近くを歩いていたのを見たと。それを聞いたおかあさんは、次の日曜に東二見に行くと決める。おとうさんの沖縄時代からの友人、ゴロちゃんと、不良だったキヨシ、そしてふうちゃんの四人が行く。東二見では成果がなかったが、ゴロちゃんが以前おとうさんと江井ヶ島でカレイを釣ったことを思い出す。駅二つ乗って、江井ヶ島の海岸に立つ。いつかゴロちゃんの表情が変わり、カッと見開いた目で明石に続く海岸を凝視している。陸がストンと落ちて海になっている。それは沖縄の南部の海岸線に似ている。昔、おとうさんとゴロちゃんがアメリカ軍の砲撃を避けて逃げ

Copyright © Enomoto PE Office, all rights reserved.

回ったところ、沖縄戦で最も悲惨を極めたところだ。

昨年(1999年)9月に、私は第１回江井ヶ島マラソンに参加した。快晴で非常に暑い日だった。江井ヶ島の港から、南部に似ているという海岸線を明石方面に向かう。明石海峡大橋が遠くに見える。やがて明石原人発掘の地あたりで折り返す。これを何往復かするコースである。全くさえぎるもののない強い日差しのもと、この平和な風景と、住民が逃げ回った南部の海岸がダブり、かえって寒いような気も一瞬する。のろのろと私は六時間以上かけてゴールした。

その年の12月5日はＮＡＨＡマラソンに参加した。私にとって初めての沖縄である。奥武山陸上競技場近くの道路を9時にスタートする、快晴。前の夜に古酒（クースー）を飲み過ぎた私は、ひどい状態で後ろの方からスタートしたが、ランナーが多くてなかなかスタート地点に着かない。30分かけてスタートラインをまたいでから那覇の街を過ぎ、南部に向かう。中間点は糸満市の平和祈念公園であり、やっと制限時間の10分ほど前に抜けるが、ここにある平和の礎には、沖縄戦で死んだ軍民合わせて237,779人(2000年1月現在)の名前が刻まれている。

この辺りは丘の上だが、その先が南部の海岸になる。海が遠望できる。そしてマラソン25キロあたりはひめゆりの塔である。県立第一高等女学校、県女子師範学校生徒203人と職員16人が記録されている。看護活動をする彼らひめゆり部隊に1945年6月18日に解散命令が出されるが、この陸軍第三外科の壕から脱出する直前に米軍のガス弾が打ち込まれ、兵士や学徒の多くが死亡。生き残った者も、さらに荒崎海岸に追い込まれ自決したりした。映画ひめゆりの塔では、防空頭巾を被ってこの辺りを逃げ走る彼女らのシーンがある。私達は同じ場所を平和に走り続けている。ひめゆりの塔の前で立ち止まり、短い黙祷をした。

おとうさんは自殺してしまった。ふうちゃんのまなざしは深くなり、机の前の壁にこんな言葉を書きつけた。

「かなしいことがあったら　ひとをうらまないこと
かなしいことがあったら　しばらくひとりぼっちになること
かなしいことがあったら　ひっそりと考えること」

作品は、冒頭の曼珠沙華の咲いていた丘を、ふうちゃんがキヨシ少年と再び訪れる所で終わる。今度はレンゲソウが咲いていた。

(初稿2000.7.15)

[リバイバル感想]

灰谷健次郎氏には「遅れてきたランナー」というエッセイがある。氏自身がランニングを楽しむ姿勢が書かれているが、これは本シリーズのランナーのエッセイは扱わないという方針により除外した。

一方太陽の子はわずかに冒頭シーンで曼殊沙華の中を駈けることと、沖縄と明石の海岸のマラソンを「わたしが」走ったことがあるという理由で採用したようだ。

それにしても明石は暑かった、熱中症者が出て、救急車を呼んだ。さて、この程度にしておこう。

(2021.6.05)

Copyright © Enomoto PE Office, all rights reserved.